

＜芸術と地域 — 英国都市再生の事例から＞

宮城学院女子大学・意匠学会 吉村典子

「3.1 1.」が、近代的価値観の終わりを示し、また、自然との関係はもちろん、人間と社会の様々な構造の転換に、具体的に踏み込む契機となったことは確かである。その中で、まさに本シンポジウムで議論されるような「芸術」と「地域」が、相互に関わり合いながら、再生のためのキーワードとなり、様々なプロジェクトが着手されている。

筆者が、それらを言及するには、現時点では表層的な紹介の域を超えることはできないであろうが、状況は異にするにしても、過去の事例を考察するのは、今日の問題に何かしらの示唆をすることはできるかもしれない。そこで取り上げたいのが英国の事例である。

20世紀最後の四半世紀は、産業構造の転換に直接的な打撃をうけた工業都市の再生の時代であったと言えるが、「芸術文化」を鍵に再生をはかった都市は実に多い。中でも「地域」性を強く意識して、多くのプロジェクトを組んだのが、英国北部都市マンチェスターである。

ヨーロッパの多くの都市の再生にみられる初期の手法が、廃墟・遊休地に「芸術」的要素を「移植」することによるジェントリフィケーション（高級化）であった。その要素とは、美術・博物館など、伝統的なハイカルチャーのイメージに依存した施設の底上げと言えるものであったが、マンチェスターの場合は、空き工場が「ハイカルチャー」施設に転用されていく一方で、それ以前にも、「隙間」であったその場所で、例えばレコード会社「ファクトリー・レコード」が設立され、「ハウス・ミュージック」そして「クラブ・カルチャー」へと発展している。また、運河通り沿いには、ゲイたちが「ヴィレッジ」を形成してきた経緯もある。都市再生の過程の中で「芸術」が「提示」されるものから、「創造」し「発信」していくものへと認識されていく中で、こうした「隙間」での創造性溢れる活動が、広く都市文化としても共有されていったのである。

筆者の関心は、こうした再生にみる「芸術」、その再生過程や成果とともに、「その後」の問題にもある。確かに多くの事例で、芸術文化が再生の資源として、また所謂「起爆剤」として、疲弊した地域を変えていった。しかし、その後はどうか。ここ数年の不況も手伝って「一過性」となった例も少なくない。一方、うまく人の流れができたところも、次に押し寄せるは商業主義による活性化である。

「芸術」は単なる起爆剤か。マンチェスターの例に戻れば、上述の展開から、都市文化(特にサブカルチャー)をテーマとした、文化複合施設「アービス (Urbis)」が街の中心に 2002 年に設立され、先鋭的な数々の企画展で話題を呼び、また、市民団体がこの場で都市文化について多くの議論を重ねてきた。施設への入場者および利用者数は、年々上昇傾向にあり、この施設の周辺にも新たな賑わいも形成された。にもかかわらず(そうであるからか)、これまで隣町にあった「国立サッカー・ミュージアム」が、2012年夏から、この施設すべてを占めることになる。そのため「アービス」は 2011年その活動の幕を閉じた。もちろん、サッカーもマンチェスターにとってはなくてはならない文化資源である。しかし、この転換をどのようにとらえるか、である。

再生の時代を経た現在、これに類似した事例は少なくない。営利目的や効率性を優先した結果、再生の文脈で育まれた公共性が狭められたことで、これらの例は共通している。「公共の場」には、文脈により多様な意味があるにしても、人々にひらかれた場である。そのため利用の自由な解釈も可能である。そこにこそ、芸術の「場」もあり、それによる新たな価値観との遭遇もあった。こうした過去の事例を

振り返った時、公共の場を真に公共性をもって維持できるかが、再生後の都市の課題として浮かび上がる。今日求められているような「都市の寛容性」もここにあると考えられるのである。